

堂とも号してみつかからか往生せし室也其いにしへにすむ水のふかき縁とて今もまた和泉式部とは申侍るなりとて石塔の邊にたちよりあともなくうせ侍りぬるとなむ

きつるに。御住家とは不審なり。(シテ)さのみ不審し給ひそよ。我も昔は此寺に。値遇の有れば澄む水の。春にも秋や通ふらし。(地)結ぶ泉の自が。名を流さんも恥かしや。よしそれとても上人よ。我が偽は亡き跡に。和泉式部は我ぞとて。石塔の石の火の。光と共に失せにけり。

陀羅と号し。又御堂の関白御建立なれば小御堂とも称す。是我往生せし室なりといひ捨て。いづちともなくうせ侍りぬ。

私の関心は和泉式部縁起の文学的価値の有無にあるのではなくて、和泉式部その人とその歌が、後世の人々にいかに享受されて来たかといふことにある。ここに和泉式部縁起を翻刻する理由もあるのである。他に述べるべき事も多いが、別の機会に譲りたい。

御指導いただいた清水泰先生、御示教いただいた田中重太郎先生はじめ柿谷雄三・池田勇両氏、御助力いただいた森本修氏に御礼を申し上げるとともに、向井俊恭氏の御厚意に対して重ねて御礼申し上げます。

—三四・八・一七一—

【翻 刻】

和泉式部縁起

「和泉式部縁起 上」(題簽)

抑一條院の御宇藤原氏女和泉式部といひし(切り継ぎあり)雲井のうちにし
て花の春のあした月の秋の夕
おり／＼のおもひを述であかしくら
し給けるかやう／＼身のさかりも
すきて老の坂ちかつくまゝに後世

もこゝろくるしく覚えてつら／＼
世中の常なきことを思へは生老
病死のことはり有為轉變のならひ
は獨としてのかるゝ者なし彼楊貴
妃李夫人も名のみこそ今は残侍
れかゝることほりをけふは人の上に
聞あすは身のうへにそきかまはしか
なくあたなる心かなとおもひそめ
しより浮世のましはり物うくて

同じ心さまに色このみなる女房これ
かれともなひて播州書寫山の性空
聖人に参りて後の世のことを尋御
法のをしへをうけむとてはる／＼
とそくたり給ける

(絵) (第一図)

秋もなかはの山々は紅葉の錦色々
にしくるゝ雲もたちそふや九重の
うちを立出て淀のわたりにこそつ
き給へいつしかなれぬ旅衣袖ふき
しほる秋かせもうき世をいとふた
よりとやいとゝ身にしむこゝちして
かりのやとりのいた間よりもり来る
月のさやけさは秋の夜のなき闇
路をてらすかとおもひなそらへつゝ

かりねのこの草枕むすはぬ夢
 もしのゝめもあけゆくまゝに一葉
 の船に掉さして淀の河瀬のす
 急遠きはりまへとこそいそぎけ
 れ

(絵) (第二圖)

彼性空上人は年来法華讀誦
 の功つもりて六根淨を得給ぬれ
 は此人々都より尋來へきこと
 をかねてしらせ給て御弟子達に
 の給やうあすの暮つかた都より鬼
 あまた来て我を尋ぬる事ある
 へしわれこゝにありとこたふへから
 ざるよし仰られければ皆おそろ
 しくおもはれけりさてあくる日の
 くれ程に夕日のすかたも曜はかりに
 て青柳の糸たをやかなる女房の
 中にも妙なるよそほひなるか道の邊
 の露にうちしほたれたるありさま
 見るめもあやなるすかたにて物申
 さむと坊の門をそたゝかれける

(半行空白)

あまりのせむかたなきにかひなき女
 の身として都よりはるゝと

尋まいること偏に後世のこと
 を尋まいらせ浮世の暗をはなれ
 むためそかしことさら女は五障
 三從の罪ふかき身なれはこそいよく
 上人の御慈悲をたのみたてまつる
 にせめてよそなからも上人の御す
 かたを見まいらせはやくとさきとときつゝ
 今の哥を返く詠しければ上人
 あはれにおほしめして門をひらかせ
 和泉式部にそ對面し給ひける

(絵) (第四圖)

さても生死界のありさま花の春
 紅葉の秋月の夜雪のあした思ひ
 おもひにともなひし人もみなお
 なしく過ぎりぬわかきも老少不定
 にてさきたち老たるは生者必滅
 とてかくれぬうき世のあたる事今
 さらにしられ侍りされは多生曠劫
 にも人身はうけかたく過去久遠に
 も佛教にはあひかたしとこそ承れ

上人仰られし事なれば誠の鬼類
 のはけたるよと御弟子たちは
 門をかたくとちてたそやとこたふ
 る声もなし女房たちしはらく
 たゝすみ給ふ程に日すてに西の
 山のはにかくれ入逢の鐘もこゑく
 に諸行無常をつけわたりあらし
 のこゑはありくは生滅法を
 おとろかすさて深々たる僧坊に
 は人跡かすかにして尾上の鹿の音
 信や垣根のむしのひとこゑまでも
 こゝろすみゆく室のうちは寂
 寞無人聲讀誦此經典の龜鐘
 のひゞきのみそ聞えける猶たち
 よりて門をたゝけとも開ことなけ
 れは門前のつゆに袖をかたしきつゝ
 松のひまもる月影のほのく見
 えしをなかくてかくそ思つゝけ給
 ける

くらきよりくらきみちにそ入ぬへき
 はるかにてらせ山のはの月

(絵) (第三圖)

適人間に生れなから此たひうかはすし
 て二度悪趣にかへりなば寶の山にのそ
 みて手をむなしくしたらむにことな
 らしたゝひとへに上人の御慈悲にて
 五のさはり三のとかある此身の輪廻
 妄執のすみかを出て快樂不退の里
 にいたらむ道をゝしへさせ給へ同女人
 といひなから我等か身は殊更罪もふかゝ
 らん夕にはたのめし妻を人しれす
 待わひ朝には道芝の露分まふ衣
 きぬの袖になみたのかすそひてあかぬ別
 をしたひかね行もとまるも諸共に互に
 ぬらす袖のうへとかやねかはくは上人我等
 をたすけ給へと此たひ都よりはるゝと
 たとりまいる心さしをこまゝと申され
 ければ上人つくゝと聞給て墨染の袖
 をそしほり給ふやゝありて仰られけるは誠
 に三界は夢まぼろしのことし五道は
 去ぬへき所也すみやかに本覺の都をね
 かふへし適あひかたき佛の御法に
 あひ受かたき人間の生をうけてこ
 の度空く過なはいつれの時にか生
 死をはなるへきいみしくも問給へるか
 な所詮往詣西方の道はみつからもさと

5

1

10

5

1

15

10

5

1

10

30

25

20

15

10

20

15

10

5

1

りかたし爰に正身の弥陀如来まし
ます垂跡を八幡大菩薩と申奉る
衆生を利益せむかために忝も七
寶莊嚴の浄土を出て和光同塵の
娑界にまじはり給ふ也愈々彼八幡へ
まじり苦域をさりて浄刹に生れ
む事を大菩薩に祈なはよきや
うに御はからひあるへしと上人くはし
くかたり給へは和泉式部うれしく
ありかたう覚えて八幡へまじられける

(絵) (第五四)

八幡大菩薩の御寶前に七日
七夜參籠して懇に往生の道を
そ祈請申されける比は八月廿
日あまり臥待の月もほのく／＼とみ
え通夜の人もしつまり五更の空
もいとさえて風にそよく萩の葉の露
うれふる虫のこゑ皓々たる月の光朧々
たる曉の鐘あくるをつくる鳥の聲
までもあはれをもよほすばかりなりかかる
折ふし御殿の中より妙なる御こゑ
にて

世中はかせ萩の葉の末の露
きえかへりてもあるは有かは

(一行空白)

是はすみやかに世をいとふへき事をす、
め給ふ御詠哥なりけに朝には紅顔あり
て世路に栄花をひらけとも夕には白骨
となりて郊原の草露にくちぬ宵には
朗月を翫し友も曉は別離の雲に
かくるとかやかゝるあたし世中に何に
心をとゝむへき末の露もとのしつくの
をくれさきたつはあれと残りともまる
はなき身そと八幡大菩薩のつけまし
ます御詠哥なりと和泉式部思
とりていとゝ心肝にそみて尊さのまゝ
思ひつゝけ侍りける
極樂のみちのしるへは我身なり
こゝろひとつのなをきなりせば

(一行空白)

まことに八万の聖教は衆生に悟を
ひらかしめ給はむとの方便なりされ

はわれらをつなぎとゝむる三界のき
つなをは佛法信心のつるきをもてき
るなれば往生の道も尤心にまことを
いたして心のうたがひをやめて偏に弥陀
の本願をたのみ信力よはからすは本願
さらにあやまりあらしたのもしきかなや
一念十念の功力にて十惡五逆も消
盡しよろこはしきかなや一稱南無
の悲願なれば往生必とけぬへしと和
泉式部喜の涙袂にあまるはかり也
又大菩薩夢中に告てのたまはく我本
地は安養世界の教主也和光のちに
まじはりしより垂迹の道に迷て出離
の教法を忘れたりさて都のほと
り誓願寺といふ所の本尊は春日明
神の御作正身の弥陀如来にておは
します超世の願力にこたへて一切衆生
を導給へる本尊也かしこにて祈
請すへしと告給へは御示現いよ／＼
忝く歡喜の涙を袖につゝみ誓願寺
にまうてゝ四十八日參籠し一すちに
往生をいのられける

(絵) (第六四)

翻刻 和泉式部縁起

ある夜の夢によはひ四十はかりの尼
一人来りて和泉式部に告て云いみ
しくも思立ぬる道かな往生極樂
の爲にはあなち心に心をこらし身をせめ
てもねかふへからす佛たすけ給へと
おもふを便にて天真獨朗の月の光
無明の迷暗を照し給ふへし殊に女人
の往生は彼草提希婦人の爲に弥陀
如来まのあたりあらはれ給ひ其の身を
あらためすして往生を遂給ぬ末の世
の女人も南無阿弥陀佛と唱なは婦人
のこゝろ往生うたかふへからすされは此名
号は凡夫のみ唱て往生するにもあらず
過去現在未來の諸佛も唱給也夫
生死をいてゝ菩提におもむく要路ま
ち／＼なりといへとも濁世の群類は念
佛にしく事なし故に八萬諸聖教
皆是阿弥陀ともいひ諸教所讃多
在弥陀ともみえたり釋迦如来は六方恒沙
の諸佛證誠とも説給へり一たひ南無
と唱ふれば歸命本願のことばりにて
決定往生うたかひなしとて彼尼一首
の哥をそ詠しける

阿弥陀仏といふより外は津の國の
なにはの事もあしかりぬへし

(一行空白)

只此哥を心にそめて偏に本願をた
のみ奉るへし佛の来迎はこゑを尋
てきたり給ふへし相構ゝゝ不生疑
心して名号を専念し聖衆の引摂を
待へしとて夢さめぬ其後は和泉式
部一すちに摂取不捨の本誓をあふき
晝夜の稱名をこたらすされは常に紫雲
をゝかみ音楽をきゝけるとなむ小御堂
を誓願寺へ日夢のほかは立さらす多年の
礼讃功つもりてつゝみには出家し名を専
意とあらためなかく輪廻のきつなを
きりはるかに憂世の塵をはらひ持戒
清浄の僧尼となりて長和三年の末
の春廿一とかや西にむかひ端坐合掌
し紫雲軒にたな引異香空に薫
しつゝ往生の素懷をそとけにける

(絵) (第七図)

の御宇建治二年弥生の比一遍上人
に來談して衆生に信心をすゝめ給ふ
事侍り上人の生國は伊豫國河野一族
幼稚にては松壽丸と名つけ初は天台
の門流にいり剃髮染衣の時隨縁と号
一念三千一心三親の窓に心をすますといへ
とも動すれは我慢のはたほこ高く我に
勝れるをそねみ劣れるをいやしむこゝ
ろのみをこりけりかくては善惡不二の理
に相違しぬと思わつらひ一切経をひら
きみるに無量壽經には其佛本願力
聞名欲往生皆悉到彼國自致不退
轉と説り亦浄土本縁經には一念弥陀
佛即滅無量罪現受無比樂後生
清浄土とみえたり其外六字の名号に
をきて諸経の明文甚多しされは妙樂
大師諸教所讃多在弥陀の釋儀今更
心腑に銘し將亦恵心僧都往生要集
の趣法然上人撰釋集のすゝめ末世相應
の教なりと思ひしより忽に自力難行を
すて他力易行の道にをもむき鎮西の
門室に入誓浄土の法門を学しけりしか
りといへとも衆にましはるならひ寺役
にいとまなければ是も念仏のさはりと常

韻刻 和泉式部縁起

25

1

5

10

15

一一〇

凡當院の内小御堂と申は御堂関
白の御建立として寂信も浅からず
然るを和泉式部に給はりて此所に
住けるとなむ本尊は六方稱讃の如
來十惡迎摂の教主弘法大師の刻彫也
たゝ当來の引攝のみにあらず和泉式部
最愛の息女小式部内侍病床にふしゝ
時醫療術をうしなひ精祈給をそかり
しにいかになむ行へき方もおもほえずお
やにさきたつ道をしらねはとよみて此本
尊に歎申しかは尊像眉間より光を
はなち内侍の頂を照し給ふと見え
て病患忽に平癒すとかや又地藏菩薩
は彼和泉式部年來の艶書を覆身せ
られけるとなん石塔はもとより其遺
躰として往生浄土の勝鬪と成
ぬ今も彼跡をしたひ菩提をねかはむ
人は現世安穩後生善處うたかふへ
からす

「和泉式部縁起 下」 (題簽)

藤原氏の女和泉式部往生佛圖
の後二百六十余歳を過て後宇多院

1

15

10

5

1

はかなしみけるおりふし親類のうちに
愁傷の事出来にければこれを善知識
として故郷を立てまつ御熊野に
參詣し給ひけり

(絵) (第八図)

三御山の躰をのつからなる靈地にて
心詞もをよはれず大悲擁護の霞は
其いにしへもかくやとみえ靈驗無雙
の太神は音無川に御影をうつし
或深山峨々たるは神徳の高きになそ
らへ或溟海漫漫として弘誓のふか
き事を表せりとまことに尊くおほ
えたり

(絵) (第九図)

かくて本宮證誠殿に通夜し深
更に及び人しつまり燈かすかなるお
りふし御殿のうちより告曰我は是
安養界の教主十劫正覺の如來たりと
いへとも濁世の衆生をあはれみ此處に
居をしむる事年久し所を無漏の

25

20

15

10

5

5

1

5

1

30

郡と名つけ殿を證誠殿と号するこ
と本土極樂の表相なり影向の当初
より貴賤参詣の中に適智恵の人あ
りながら正雜をわかし淨不淨を撰のみ
なり時澆季の衆生いかにか正智ならん
かゝる輩順次の往生遂かたし此等かた
めに五劫思惟して六字名号の中に
諸法を納き六字名号一遍法十界依正
一遍躰萬行離念一遍證人中上々妙
香花この文の心を持て國土にひろめ智
恵の門をは他に譲り慈悲の門を自
領して衆生に化度せしむへしと
現に告知しめ給ふと思ひて夢さ
めぬ上人示現のたうとさのあまり
感涙をさへかたぐ墨染の袖しほ
るはかり也やかて神慮にまかせ南無阿
弥陀佛六十万人決定往生の印を
國土にひろめければ諸神諸天童男童
女の形を現し御札をうけたもち
給ふこと勝計すへからず

(繪) (第十四圖)

建治二年三月十日あまりには洛陽誓

られたる六十万人は決定往生疑ある
へからずさて其外の衆生は往生にもるへ
しや上人答て曰是は御熊野の御
示現に六字名号一遍法十界依正一
遍躰萬行離念一遍證人中上々妙香
花と云四句の文あり此文の上の字はか
りを札の面にあらはせり人数のかき
りにはあらすたゝ南無阿弥陀佛と申
せは往生は決定なりと一心不乱にしん
し給へ此外は別の子細なしとかたり
給ふ化女上人のしめしをうけて弥た
のもしくて末世の凡夫我らこときの女人
までも撰取不捨のちかひにもるへからずと
信解す化女重て言誓願寺とうちたる
額を上人の手蹟にて南無阿弥陀佛に
かきかへて打給へ是みつからかのそむ所に
あらず本尊の御告なりといふ上人奇異
の思をなし其名を尋たまふに化女の
云あれにみえたる御堂は八曼陀羅堂
とも申又御堂閑白建立たるによりて
小御堂とも号してみつからか往生せし室
也其いにしへにすむ水のふかき縁とて
今もまた和泉式部とは申侍るなりと
て石塔の邊にたちよりあともなくうせ

願寺にまうて御堂を拜せしに天智天
皇の御願として星霜ふりぬといへとも
内外の莊嚴潔し本尊は春日明神の
御作として誠に尊く覚えたり参詣の貴
賤袖をつらね通夜の道俗くひすをつきて
しな／＼也漸深更に及ぬれば稱名の妙香龜
鐘の響生死の眠もさめぬへしされは心なを
とゝまるは黄金樹林のゆふへの色涙とゝ
まらさるは上品蓮臺の曉の如くとい
へるもかゝるおりをや申へき上人たつ
とさのあまりかやうに思つゝけ給けり
となふれば佛も我もなかりけり南無阿
弥陀仏のこゑはかりしてと詠し給へは
諸人皆感涙肝に銘しつゝ心すみぬる
室の戸のあけゆくまゝに上人は御札
を弘めたまふに受たもつ数／＼は稲
麻竹葦のことし

(繪) (第十一圖)

かゝりける所にその様ゆうなる女人
すゝみ出て申やう此御札の面に南
無阿弥陀佛六十万人決定往生と
みえたり是に尤不審あり御札にのせ

侍りぬるとなむ

(繪) (第十二圖)

さてはいにしへの和泉式部の霊魂
あらはれ還来穢國土人天の願にこたへ
て一切衆生を導なるへしとありかた
くて先上人御墓に参り發露涕泣
し法施の念佛しはらくなり其後上
人本尊の示現にまかせて六字の
名号をかき額にうちかへられければ異香
は空に薫し音楽のこゑほのかなり
彼大江定基か清涼山にして笙歌遙聞
孤雲上聖衆來迎落日前と口すさみ
けるもかくやとたとき處に靈雲軒
にたなひき瑞光砌をてらし和泉式部
歌舞の菩薩もろともにはあらはれ出て
告曰善哉上人此名号といふは願に非
ず密にあらす名号不思議と説りさ
れば阿字十方三世佛弥字一切諸菩薩
陀字八万諸聖教とみえたり惣て六字
のうちに万法納れりと菩薩聖衆各低
頭合掌し給へは上人をはしめ諸人みな
おとろき参敬礼拜したてまつる

(絵) (第十三回)

和泉式部重て告曰夫六字の得益
は末世の衆生のみならず佛の父淨飯
王漸老躰に及ひたまひ秋の夜のなか
きに御夢をさまし思食つゝけゝるは
我釋迦仏程の孝子をもちながら未出離
生死の要法を聞さためす壮年の昔
より衰老の今に至るまで一切所作おもへ
は三途の業因なり只今も一息絶行に
をよひ黄泉の旅におもむき無常の
敵鬼に呵責せられむ時は百官郷相七
珍萬寶一として身に随へからすとうち
驚きやかて佛所へ往詣なるおりふし
仏は大覺講堂にして觀佛三昧經を
説給へる砌なり時に大王佛に白言朕大
なる望ありて詣せり其ゆへは仏法聽
聞の時はいつれ愚ならずといへともま
さしく我身に当て修行すへき要侍を
聞さためす願は世尊無上深法を授給
へ時に世尊顔色清淨而白言善哉此
事を聞給へり所詮仏法修行の道さ
まさまなりといへとも草妄六穢の爲には

1

5

10

15

20

一二四

六字名号にしくはなし然は晝夜不退に
弥陀を念し西方極樂を願給へしとし
めし給ふ時に大王不足の思に住し龍
顔以外にかはり仏に申給仰仏は三世
了達の智慧をもて衆生を導き給
と承る我身愚なればこゝろをこらし深
き悟には入かたくとも檀波羅密又は
起立塔婆の功德ならは高き雲に
及といふとも何そ力をおしむへき然而
若干の衆會にして纔六字を授けら
るゝ恥かましさに三界の獨尊たりとい
へとも現在の父を惡道におとし給へからす
と以外の逆縁にてましませは釋尊大に驚
たまへりやゝありて威儀をとゝのへ父王に
白言世間に伊蘭と云木あり大王知食や
否それはしれりと答給へりいか程はひこ
りたるをか觀覽しますと四十里にみ
ちたるを見たりとの給ふ時に世尊の言彼
伊蘭樹の臭事驗をとるに物なし水
一葉を身にふれぬれば忽悶絶躰地す況四
十里にみちたらむをや然而彼四十里内に牛
頭栴檀纔に二葉に生出ぬれば惡香ことく
くうせ栴檀の匂のみなり人一日一夜の内
に八億四千の念あり念みの所作皆是三

25

30

35

40

45

70

75

途の業なりといへり彼惡業は伊蘭樹の

ことし南無阿弥陀佛は梅檀の如くし
て無始の罪障消滅す六字少といふとも豈
最上の深法ならさらむ哉然は大王晝夜不
退に名号をとなへ西方極樂を願給へしと
懇に申給へは大王をはしめたてまつり無
量無數の菩薩聲聞天龍八部人非人
等に至るまで皆感涙を流し悉念佛
に歸して成仏得脱の巨益を得給ぬ仏在
世如行末世相應の教なれば誰か是を
修せさらむ然に上人修行のはしめ九州鶴
見の嶽の麓にて梅檀樹に刻彫の名
号又紀州万歳か峯にて靈石の名号
唯今比額の名号是則空假中の三
諦法報應の三身として見聞の結
縁尤最上なれば釋尊御父の爲のしめ
しに相叶へりし石塔の前にて結ふ水
は八功德水を表せり貴賤心に誠をいた
して名号を唱へ有縁無縁に廻向す
へし然は淨飯王の如く成仏得脱證
大菩提の道疑あるへからすと懇に示し
をき紫雲に乗して西の空にのほり給
ぬその時上人をはしめ參詣の人隨喜感歎
して遙に西の空を拜し給となむこの

翻刻 和泉式部縁起

(三行空白)

しめしを聞人々弥陀如来の御告そと
ありかたく思ひて和泉式部の跡をした
ひ參詣をこたらず名号を唱水をむすひ
志す所の亡者并法界衆生に廻向し給
は、現当の請願成就して臨終の夕に
は弥陀如来共五菩薩無數の聖衆共に
来迎引摂にあつかり西方極樂世界上品
の臺にいたり給はむ事決定してうた
かひあるへからす

泉涌寺末寺誠心院泉式部

縁起彼院主歎旧記之陵夷最營福

之門戸新畱繪了仍一覽之次感彼志

染鬼毫者也

寛永廿季小春下旬

戒受庵

肆陰虔眞書寫

雪染 (朱印)

65

60

55

50

一二五